

横浜市立 二谷小学校

学校評価報告書

(令和 7 ~ 9 年度)

重点取組分野	令和 7 年度		総括	重点取組分野	令和 8 年度		総括	重点取組分野	令和 9 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果			具体的取組	自己評価結果			具体的取組	自己評価結果	
確かな学力	①スキルタイムでは、基礎基本の徹底を目指す。 ②1～3学年は基礎基本の徹底を中心に、4～6学年はめあてから振り返りまでが一貫した自主学習を行い、定着させる。 ③ペア、グループ学習など、あらゆる教科で友達と協働しながら課題解決を目指す対話的な学習を進める。 ④「個別最適な学習」を授業に盛り込めるように研修等を行い教職員に周知する。 ⑤単元ごとに振り返り活動を行うことを重視する。	①2横浜市学習状況調査結果より、全ての学年、全ての教科において市平均より高い到達度が確認された。基礎基本の繰り返しの成果と考えられる。 ③重点研究授業を多く参観し、協働的な学習が全学年に定着していることが確認された。生活意識調査においても児童が友達と学ぶことについて肯定的にとらえる傾向が見られたので今後も継続したい。 ④個別最適な学習については十分に達成できたとは言えない。来年度に向けて改善したい。 ⑤重点研究授業からも振り返りが定着している。成果については、数年の追跡的な考察が必要だと考える。	A	確かな学力	①スキルタイムでは、基礎基本の徹底を目指す。 ②ペア、グループ学習など、あらゆる教科で友達と協働しながら課題解決を目指す対話的な学習を進める。 ③「個別最適な学習」を授業に盛り込めるように重点研究部とも連携した学習・研修等を推進する。 ④振り返り活動をさらに推進する。			確かな学力	c1		
	豊かな心	①規範意識を高め、健全な自尊感情を育むために、道徳教育・人権教育の充実を図る。 ②子どもが挨拶の大切さを自覚し、気持ちの良い挨拶をすることができる。 ③より良い学校生活を送れるように、自他の立場を考えて協力し、進んで異学年が関わり合うようにする。	①横浜子ども会議に出席して交流した結果運営委員会の児童が取り組んでみたいと提案した内容に全校で取り組み人権について真剣に考える時間を取ることができた。人権週間に道徳と取り組む際の資料に関しては刷新する必要がある。 ②昨年と同じ形であいさつ運動を行ったが、担当学年はとても意欲をもって取り組み、軌道に乗ってきた。次年度も続けたい。 ③今年度は交流ができそうな場面を想定して年度初めに交流計画を立てたが、実際には多く交流した学年と全く交流していない学年とができてしまった。次年度はペア学年という縛りをなくして交流を考えていきたい。		B	豊かな心	①自分の大切さと共に他の人の大切さを認め、相互に尊重し合う態度や行動を育むために、道徳教育・人権教育の充実を図る。 ②より良い学校生活を送ることができるように、自他の成長を見据えて、進んで異学年が関わり合うようにする。 ③子どもが主体となったあいさつ運動を通して、あいさつの大切さを自覚し、気持ちの良いあいさつができるようにする。				c2
健やかな体		①体力向上タイムや運動週間を設定し、全校で運動に親しむ機会をさらに増やす。 ②健康診断や体力・運動能力調査の分析をもとに健康課題について見つめ、子どもが自ら解決に向けて様々な活動に取り組む。 ③すこやかタイムの更なる充実を図るため、食育・保健・運動についてバランスよく取り組む。また、ロイロノートを活用し、学びの蓄積ができるよう工夫する。	①体力向上タイムでは、常時活動に加え、ペア学年で活動する機会も設けたことにより、運動に親しむ姿が多く見られた。 ②本校の健康課題である姿勢をテーマに、学校保健委員会を進めることができた。一方で、体力テストの結果を活動に生かすことができなかった。 ③すこやかタイムでは、ロイロノートを活用し、児童の発達段階に応じた課題に取り組むことができた。振り返りの視点が明確に示せなかったため、改善の必要がある。	A	健やかな体	①体力・運動能力調査を分析し、本校の健康課題を見つめ、解決に向けた活動を設定する。(体力向上タイム・運動週間など) ②学校保健委員会を活用して、健康課題解決のために全校で取り組む。 ③すこやかタイムでは、児童の委員会活動での取組とも関連させながら、運動・保健・食育について深められるようにする。ロイロノートのアンケート機能を活用しながら、振り返りの時間も充実させる。			健やかな体	c3	
	自分づくり	①一人ひとりが、他者との関わりの中で自分の思いを表現しながら、自己有用感を高めるようにする。 ②「協働的な学び」を意識した授業づくりを行い、子どもたちが自身の考えの変容や深まりを実感する中で、肯定的に自己評価し、自信をもって学習に取り組むことができるようにする。	①子どもの必要感に応じて、ペア学習やグループ学習など学習形態を工夫したことで、一人一人が自分の思いや考えを表現することができた。 ②協働的な学びを意識するとともに、課題設定→振り返り→課題設定のスパイラルを大切にすることで、自分の考えの変容や深まりを実感することができた。	B	自分づくり	①児童一人ひとりが、他者との関わりの中で自分の思いを表現しながら、自己有用感を高められるように授業改善をする。 ②「協働的な学び」を意識した授業づくりを行い、子どもたちが自身の考えの変容や深まりを実感する中で、肯定的に自己評価し、自信をもって学習に取り組むことができるようにする。			自分づくり	c4	
いじめへの対応		①子ども会議を通して、子どもが主体となった未然防止の活動の充実を図る。 ②いじめ防止対策委員会では、情報共有を図り、児童が安心して過ごせる環境づくりに努める。 ③児童理解・いじめに関する研修、YPなどのアンケートを活用し、子どもの些細な変化を見逃さない体制づくりに努める。	①人権週間を通して、「いじめをしない自分であるために」クラスで話し合い、子どもたち自身がいじめについて考えることができた。 ②毎月開催のいじめ防止対策委員会に全校職員が参加することで、より確かな児童理解に取り組んだ。 ③定期的なアンケートや面談、L・gateで児童の様子を把握したことが、いじめの未然防止、早期発見、早期対応、再発防止につながった。	A	いじめへの対応	①子ども会議を通して、子どもが主体となった未然防止の活動の充実を図る。 ②いじめ防止対策委員会では、情報共有を図り、児童が安心して過ごせる環境づくりに努める。 ③児童理解・いじめに関する研修、L・gate、YPなどのアンケートを活用し、子どもの些細な変化を見逃さない体制づくりと、未然防止、早期発見、早期対応に努める。			いじめへの対応	c5	
	人材育成・組織運営(働き方)	①学年、ブロック等の組織を活用し、日常的に研修に取り組むことで、キャリアステージに応じた指導力の向上を図る。 ②ICTを活用した事務の効率化や情報の共有化を図るとともに、組織的な働き方改革につなげる。 ③全校で一部教科分担制に取り組む、教師の指導力向上を図るとともに働き方改革を進めていく。	①メンター研では、管理職やミドルリーダーが講師となって研修を行い、指導力の向上を図った。 ②ICTを活用した事務の効率化や会議の取り組みを行い、働き方改革につなげた。職員の意識の向上にもつながった。 ③高学年ブロックの導入や一部教科分担制、習熟度別学習をとり入れたことで、授業力の向上や働き方改革とともに、多くの職員の目で子どもを見取り、児童理解を深めることができた。	B	人材育成・組織運営(働き方)	①学年、ブロック等の組織を活用し、日常的に研修に取り組むことで、キャリアステージに応じた指導力の向上を図る。 ②ICTを活用した事務の効率化や情報の共有化を図るとともに、組織的な働き方改革につなげる。 ③全校で一部教科分担制に取り組む、教師の指導力向上を図るとともに働き方改革を進めていく。			人材育成・組織運営(働き方)	c6	
学校運営協議会		①授業参観・学校行事への参加の機会を設定し、様々な視点から意見をいただき、学校運営の改善に役立てる。 ②学校評価アンケートの回答状況をふまえることで、地域と学校のニーズに合った学校運営協議会の運営に努める。 ③年4回の開催の中で、テーマを決めて計画的に進め、地域に開かれた教育課程の推進を図る。	①学習参観や面談など月に1回程度、本校の教育活動の様子について保護者・地域の方に見てもらう機会を設定することができた。 ②③子どもたちの様子や中期経営方針の目標や取組、その成果と課題について学校評価アンケートや学校運営協議会の中で各行事や教育活動に関するご意見をいただき、今後の改善の視点に役立てることができた。	B	学校運営協議会	①授業参観・学校行事への参加の機会を設定し、様々な視点から意見をいただき、学校運営の改善に役立てる。 ②学校評価アンケートの回答状況をふまえることで、地域と学校のニーズに合った学校運営協議会の運営に努める。 ③年4回の開催の中で、テーマを決めて計画的に進め、地域に開かれた教育課程の推進を図る。			学校運営協議会	c7	
	特別支援教育	①より確かな児童理解ができるように職員会議や学年研を工夫して組織的に情報共有や共通理解ができるようにする。 ②関係機関との連携を図り、合理的配慮やユニバーサルデザインをテーマにした職員研修を行う。 ③特別支援委員会の充実を図ることで、一人ひとりの子どもの教育ニーズを受け止め、支援を考える。	①学年研や全教職員で、配慮児童の情報を共有し、合理的な配慮について考えることができた。 ②コンサルテーションを行ったり、外部講師を迎えての職員研修を開催したりすることで、教室環境整備や個に応じた支援など、児童対応に関する学びを深めた。 ③ケース会議や校内委員会を行ったり、個別の指導・支援計画を定期的に見直したりすることで児童支援の充実を図った。	A	特別支援教育	①より確かな児童理解ができるように職員会議や学年研を工夫して組織的に情報共有や共通理解ができるようにする。 ②関係機関との連携を図り、合理的配慮やユニバーサルデザインをテーマにした職員研修を行う。 ③特別支援委員会の内容の充実を図ることで、一人ひとりの子どもの教育ニーズを受け止め、支援を考える。			特別支援教育	c8	
					b9				c9		
					b10				c10		
ブロック内評価後の 気づき	・小学校で行ってきた学習や生活全般への取り組みをいかして中学校生活をよりよく過ごす「つながり」を確認できた。 ・ICTの活用により、小学校からタイピングの技術が向上しており、中学校での指導がほとんどなくてよい。 ・小中交流会の実施により、6年生が中学校に興味関心をもてたことを実感できた。 ・食育について小学校の情報を共有し理解を深めることができた。 ・ICT活用やノート、ワークシートの使い分けについて、学習に興味をもたせることはできているが、それが深い学びにつながっているのかが課題ともいえる。また、自己表現の苦手な児童生徒も多く、自ら主体的に学習する力を身につけさせる支援を目指す必要がある。			ブロック内 評価後の 気づき				ブロック内 評価後の 気づき			
学校関係者 評価	・運動会などの行事に子どもが一生懸命取り組んでいてよい。 ・ICT危機を使いながら、学習を進めていて、教育効果をあげている。 ・あいさつをしたり、きまりを守ったりする子どもが多い。 ・子どもたちが楽しそうに学校生活を送っている様子がよく伝わってくる。			学校関係者 評価				学校関係者 評価			
中期取組 目標 振り返り	誰一人取り残すことのない教育の実現に向け、子どもの思いを汲み取りながら、教育活動に取り組んできた。重点研究や日々の児童理解、いじめ防止対策委員会、打ち合わせなどを通して、子どもが安心して学校生活を送ることができる環境づくりに努めた。その結果、子どもが自己有用感を感じたり、自己肯定感を高めたりすることができるようになってきている。今後は、児童一人ひとりの資質能力や特性などを理解したうえでの個別最適な学びや多様な人との関わりを大切にしていきながら、課題解決に努める協働的な学びを一体的に充実させていくことで、学校教育目標の実現に努めていきたい。			中期取組 目標 振り返り				中期取組 目標 振り返り			